家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

有間皇子

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

大海人皇子

君が行く道の長道を繰り畳ね焼きほろぼさむ天の火もがも

狭野茅上娘子

万葉悲劇の中の歌

金子武雄著

作歌と人間

万葉 悲劇の中の歌

——作歌と人間——

金子武雄著

KORON SHA

公　論　社

≪著者略歴≫

金子武雄（かねこ・たけお）

明治30年5月10日生れ。
昭和8年3月　東京帝国大学文学部国文学科卒。
第八高等学校・東京高等学校（共に旧制）教授，
東京大学・駒沢大学教授・昭和女子大学教授を経て，
現在　東京大学名誉教授。

≪主要著書≫

『統日本紀宣命講』（白帝社）
『延喜式祝詞講』（武蔵野書院）
『日本のことわざ』（全五巻，大修館書店）
『古事記神話の構成』（桜楓社）
『上代の呪的信仰』（公論社）
『祢詞 枕詞 序詞の研究』（公論社）
『万葉 防人の歌』（公論社）
『万葉 高橋虫麻呂』（公論社）

現住所　東京都小金井市桜町 1-7-17

万葉　悲劇の中の歌　——作歌と人間——　3392-339901-2449

昭和54年4月15日発行

著　者　金子武雄
発行者　里見　匡

発行所　東京都渋谷区道玄坂1丁目15番3-205号　株式会社　公論社
〒150　電話（03）476-3157（代表）　振替　東京 8-196170

印刷　壮光舎印刷株式会社　製本　誠製本株式会社

© 1979, Kôron sya

まえがき

万葉集の中には、悲劇あるいは悲恋と呼んでよいような事件の中で作られたとされている歌も、かなり多く収められている。万葉集の巻々が編纂されたころには、それらの事件の多くは、伝承されて行くうちに物語化されていたものと考えられるが、編者はそうしたものの中から歌を取り出して収めたものと思われる。そのことは、それらの歌の題詞の書き方からも推察されることである。そうしてその際、編者は部立によっての分類と配置はしながらも、それら物語化された伝承の筋を意識して配列したと思われる。

それから、それらの歌の中には、万葉集にしるされている題詞の通りの作者によって作られたものとは思われず、物語化されて伝承される間に、誤られたり、さらには後人によって事件中の人物に仮託創作された虚構の作と考えられるものもあるらしいことは、近時の研究者の努力によって次第に明らかになりつつある。

本書ではそうした研究にも負いながら、日本書紀・続日本紀・懐風藻など、当代の文献に散見

する資料を参考して、それらの事件の真相を究明すると共に、その中で歌がどのようにして作られたかを考察しようと思う。もっとも、私の究極の目的は、そうした真実を究明した上で、歌を作るということと人間との係わり合いを考えるということにある。すなわち、悲劇あるいは悲恋という、人生の重大な境涯の中で、なぜ歌を作ったのか、そうしてそれがその人の生にとってどんな意義を有つのか、などということを考えてみようと思うのである。

採り上げた事件は、目次にある通りであるが、それらの中には、湯原王と娘子との交渉や石上乙麻呂の配流のように、かならずしも悲劇とか悲恋とかと言うのに適わしくないと思われるものもあるが、これらは他のものと比較する料にしたいと思うのである。

昭和五十四年春

金子武雄

付記

一、日本書記・万葉集・懐風藻の中から本書が引用した箇所は、著者にとくに異見のない限り、岩波書店刊「日本古典文学大系」の読み方に従った。

一、歌の理解には解釈が基礎になるので、引用の歌には一々現代語訳を添えたが、なお、巻末には「国歌大観」の番号順に略注釈をも加えた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

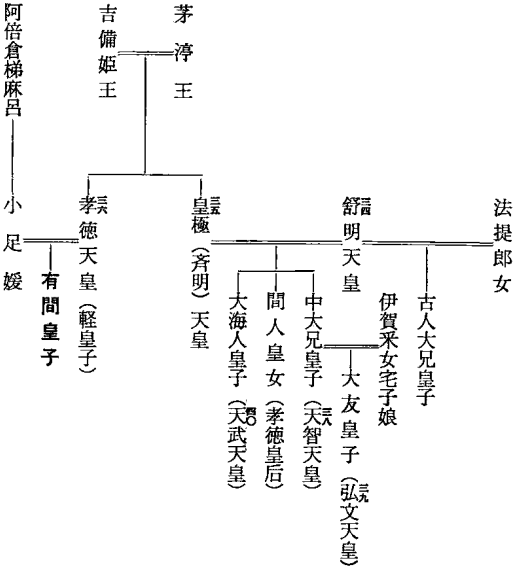
目次

まえがき　iii
椎の葉——有間皇子——　1
むらさき——額田王——　23
山清水——高市皇子——　47
恋の奴——但馬皇女と穂積皇子——　59
あしび——大津皇子・大来皇女——　73

月の楓——湯原王と娘子——　103
夕かげ草——笠女郎——　117
たわやめの惑——石上乙麻呂——　143
天の火——中臣宅守と狭野茅上娘子——　155
「魂はあしたゆふべにたまふれど」考　208
歌の略注釈　215
注　242

椎の葉

——有間皇子——


法提郎女
舒明天皇
古人大兄皇子
伊賀采女宅子娘
大友皇子（弘文天皇）
中大兄皇子（天智天皇）
間人皇女（孝徳皇后）
大海人皇子（天武天皇）
皇極（斉明）天皇
茅渟王
吉備姫王
孝徳天皇（軽皇子）
有間皇子
阿倍倉梯麻呂
小足媛

孝徳紀――日本書紀の孝徳天皇の条――によれば、中大兄皇子らによって蘇我入鹿・蝦夷が殺されたあとすぐ、皇極天皇は位を自分の子である中大兄皇子に譲ろうとしたが、中大兄皇子は、兄――異母兄古人大兄皇子――や叔父――軽皇子――を措いて位に即くのはよくない、との藤原鎌足の忠告に従って即位を辞退し、即位は軽皇子に向けられた。しかし軽皇子は古人大兄皇子を推したが、古人大兄皇子は固く辞退し、すぐに出家して吉野に隠退したので、軽皇子はやむなく位に即いた。孝徳天皇である。古人大兄皇子も軽皇子も、中大兄皇子を恐れていたに違いない。

実力者中大兄皇子は孝徳天皇の皇太子となったが、三箇月後の大化元年（六四五年）九月十二日、自分の妃倭姫王の父でもあり異母兄でもある古人大兄皇子を、密告により謀反の罪名によって責めて殺している。それから四年後の大化五年（六四九年）三月二十五日には、これも自分の妃である遠智娘・姪娘の父蘇我倉山田石川麻呂を、やはり讒言により謀反の罪名で責め、自殺させている――あとでその遺書を見、無実を知って後悔し嘆いたという――。それからさら

に四年後の白雉四年（六五三年）には、難波の都――大化元年に大和から長柄豊碕に遷されている――から大和に遷ろうとして天皇に申し出たが許されなかったのに、母と妹間人皇女と弟大海人皇子とをひき連れて強行し、大和へ帰った。間人皇女は孝徳天皇の皇后であった。こうして孝徳天皇は憤怒と怨恨のうちに病を得て、翌、白雉五年（六五四年）十月十日に没した。この月の一日には、中大兄皇太子は母と妹と弟らを連れて難波宮へ赴いているが、形式だけの見舞いと情況視察のためだったのであろう。

翌年の正月三日、中大兄皇子の母が再び位に即いた。斉明天皇である。中大兄皇子はひき続いて皇太子の位に在る。今はその前途に邪魔になる者は孝徳天皇の一子、有間皇子だけである。こうした事情の中で、それから三年後、有間皇子の謀反という事件が起きた。

有間皇子の母は、阿倍倉梯麻呂の女小足媛で、舒明天皇の十二年（六四〇年）に生まれ、父孝徳天皇の没した時は十五歳であったから、父の怨念も知らないはずはなかった。その謀反事件に関する記事は次の通りである。

まず、斉明紀三年（六五七年）に、

九月に、有間皇子、性黠くして陽狂すと、云云。牟婁温湯に往きて、病を療むる僞して來、國の體勢を讚めて曰はく、「纒彼の地を觀るに、病自づからに鐲消りぬ」と、云云。天

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

皇、聞しめし悦びたまひて、往しまして觀さむと思欲す。

とある。これによれば、有間皇子は性質が悪賢く、いつわって狂気になったふりをし、紀伊の牟婁温泉に行き、病気を治療するまねをして来て、その地の風景を讃め、「ほんの少々、あの地を見ただけで、病気はしぜんに癒ってしまった」と言った。斉明天皇はこれを聞いて喜んで、自分も行って見ようと思った、というのである。（「云々」とあるのは、原資料にはあった部分を、日本書紀の編者が省略したのであろう。「牟婁温湯」は白浜町湯崎温泉のことである。）そうだとすると、有間皇子にはもともと謀反の意図があって、天皇や皇太子を都から紀伊へ誘い出そうとしたということになる。

斉明紀四年（六五八年）には、

冬十月の庚戌の朔甲子（十五日）に、紀温湯に幸す。

とあって、翌年の十月十五日に天皇は皇太子を伴なって牟婁温泉へ行った。有間皇子の計画通りに運ばれたということになる。

そのあと、

十一月の庚辰の朔壬午（三日）に、留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰はく、「天

皇の治らす政事、三つの失有り。大きに倉庫を起てて、民財を積み聚むること、一つ。長く渠水を穿りて、公粮を損し費すこと、二つ。舟に石を載みて、運び積みて丘にすること、三つ」といふ。有間皇子、乃ち赤兄が己に善しきことを知りて、欣然びて報答へて曰はく、「吾が年始めて兵を用ゐるべき時なり」といふ。

とある。これによれば、翌十一月三日、都の留守官蘇我赤兄は有間皇子に、天皇の失政として、民から重税を取り立てたこと、長大な渠を掘って国費をむだにしたこと、舟に石を積んで運ばせて丘にしたこと、の三つを挙げたところ、皇子は赤兄が自分に好意を寄せていることを知って喜んで、「私はこの年になって始めて兵を用いる時になった」と答えたというのである。天皇の失政として赤兄が挙げたことのうち、あとの二つは斉明紀二年「是歳」の条にもその詳細がしるされ、香具山の西から石上山まで渠を掘らせ、石上山の石を船で運ばせて多武峯に石垣を廻らせたので、時の人もこれを誹謗したとあるから、事実だったようである。

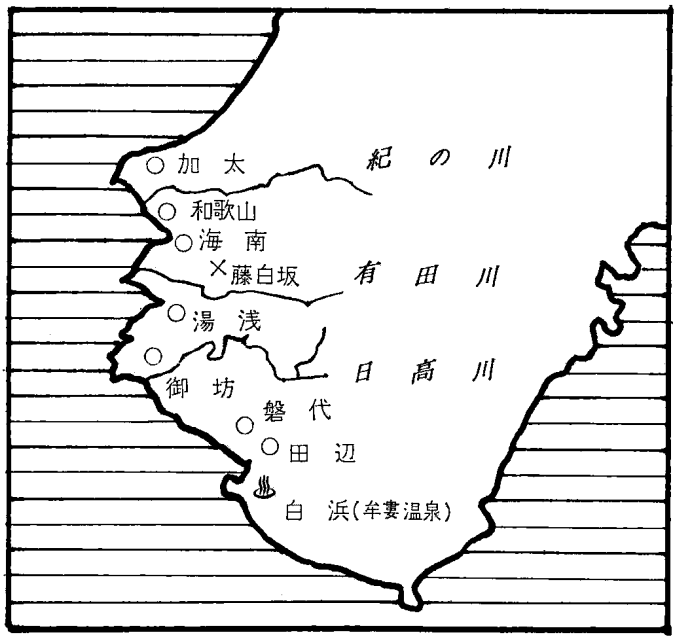
ところで、留守官といえば天皇の不在中の都を守る大事な役を担った者であり、したがって天皇の信頼の厚い者であるはずである。その赤兄がなぜ、わざわざ天皇の失政を挙げて、皇太子中大兄皇子にとって対立者である有間皇子に語り、しかも自分がその御方であるように、そうして謀反を勧めるような言い方で語ったのであろうか、と不審に思われる。とにかく皇子が「吾が年

始めて兵を用ゐるべき時なり」と答えたというのは、謀反を起こす意志を有ったことを赤兄に表明したということになる。慎重さを欠いていたと言うほかはないが、皇子はこの時、まだ十九歳の若さであった。

斉明紀は続いて次のようにしるしている。

甲申(五日)に、有間皇子、赤兄が家に向きて、樓に登りて謀る。夾膝自づからに斷れぬ。是に、相の不祥を知りて、俱に盟ひて止む。皇子歸りて宿る。是の夜半に、赤兄、物部朴井連鮪を遣して、宮造る丁を率ゐて、有間皇子を市經の家に圍む。便ち驛使を遣して、天皇の所に奏す。

これによれば、二日後の五日に、皇子は赤兄の家に行って謀反のことを謀議したが、その時、夾膝——脇息のことらしい——の脚がしぜんに折れた。これは不吉な兆であるとして、赤兄と盟って謀反のことをとりやめることにした。そうして皇子は市経——今の生駒町の一分——の家に帰った。ところがその夜、赤兄は物部朴井連鮪に命じ、宮殿造営に従事していた人夫を兵として率いさせ、皇子の家を囲んで監禁し、すぐに紀伊の牟婁温泉に滞在中の天皇と皇太子のもとに駅使を遣わし、「有間皇子謀反」と報告したというのである。ここでも赤兄の行動は不審である。自



分が謀反の共犯であることを抹消するための行動としては、あまりにも迅速であり過ぎる。

斉明紀は続いて、

戊子(九日)に、有間皇子と、守君大石・坂合部連薬・鹽屋連鯛魚とを捉へて、紀湯に送りたてまつりき。舎人新田部米麻呂、従なり。

としるしている。天皇・皇太子から指示があったのであろう、四日後の十一月九日には、皇子と謀反の謀議に加わったとされたらしい三人とを捕えて紀伊の牟婁温泉へ護送した。すべて赤兄によってなされたものと

思われる。皇子には舎人新田部米麻呂一人だけが供をした。なお、「九日」とあるのは、大和出発の日ではなく、牟婁温泉に到着した日のことであろう。

皇子らを護送する一行が、大和から牟婁温泉へどういう道筋を辿ったのかは明らかではないけれども、たぶん、紀の川沿いにその川口近くへ下り、そこから大体西海岸沿いの山道を通り、有田川・日高川を渡って南下したのであろう。そうして磐白——今の日高郡南部町——の地に到った時、皇子が詠んだという二首の短歌が、万葉集巻二(挽歌)に収められている。

有間皇子、自傷結二松枝一歌二首

141 磐白乃　濱松之枝乎　引結　眞幸有者　亦還見武

有間皇子、自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首

141 磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらばまた還り見む

(磐代の浜辺の松の枝をひき結んで、私の無事を祈って行くが、もしも無事であるならば、もう一度ここへ還って来て、これを見よう。)

「皇子は今、裁きの場となるはずの牟婁温泉を、そんなに遠くないところに望む磐代の地に着いた。そして自分の命は風前の灯のようなものであった。皇子が松の枝を結んだのは、呪力ある

呪物と信ぜられていた松を呪具として、この松との縁が切れることなく、生きて再びこれを見ることができるようにとの祈りをこめた呪術であった。皇子の祈りがかなえられたら、当然、この結ばれた松の技もそのままであるはずである――解けたら縁が切れるはずであったから――。「真幸くあらば」には、皇子の命のことと結ばれた松の枝のこととの両方の無事がこめられているのであろう。それにこの地の名は、永遠の命を有つものとして信仰の対象ともなっていた岩石にも縁があった。「磐代の」の歌は皇子のこうした祈りの心情を歌ったのである。そうして皇子はまた、当然、神にも祈ることになる。」

142 家有者　笥尓盛飯乎　草枕　旅尓之有者　椎之葉尓盛

142 家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る

（私の家にいるなら、器に盛って供える飯なのであるが、こうして旅に出ている身なので、椎の葉に盛って僅かばかり供えることである。）

当時の信仰からすれば、神に対する願いが切であればあるほど、できるだけ多くの物を供えなければならなかったのである。しかし今は旅に在る身、しかも捕われの身である。器もなく、与えられた飯も多くはなかったに違いない。その僅かな飯の中から、せめてものことに、身辺の椎の小さな葉を取ってこれに盛り、神に供えるしかない。「家にあれば」の歌は、皇子がこのこと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com